噺本における程度強調表現『とんだ』について

前　田　桂　子

（はじめに）

近世には、「きつい好きだ」「いかい結構じゃ」「とんだおもしろいことでござった」など、現代と異なる程度強調の表現が散見される（注1）。筆者は先に、前田2014において近世の程度強調表現「きつい」という語について『噺本大系』中の資料を調査し、その消長について一定の結論を得た（注2）。本稿ではそのことを踏まえ、同じく程度強調表現として近世に盛んに使用された「とんだ」について考察する。「とんだ」の先行研究としては村山昌俊1986「江戸語『とんだ』考」がある。また、洒落本、滑稽本の「いかい」「きつい」「えらい」「おそろしい」などの使用状況とその性格については増井典夫氏の研究（注3）があり、適宜参照した。

用例の収集には今回も調査資料として東京堂出版『噺本大系』を元とした国文学研究資料館のデータベースを利用した（注4）。

使用した噺本という資料は、近世を通じて出版が続いた笑話集であり、一話が短い割には様々な位相の人物が、生き生きとした会話で遣り取りする。筆者は、噺本の言語史資料としての性格を明らかにすることを目標に、同資料の言語事象をさまざまな方向から見てきたが、本研究もその一環として位置づけられる。噺本は会話と地の文の区別が分かりにくいという欠点もあるが、洒落本や滑稽本が登場人物の位相に偏りのあることを考えると、時代的な推移を追うのには、噺本の方が適していると言える。

本稿ではまず、噺本における程度強調表現の全体像を確認した上で「とんだ」の位置づけを試みたい。調査の際、資料の信頼性の担保と出版地を確定する必要性から、噺本大系内の凡例により刊年や出版地の不明な作品は除外した。調査資料は巻末参照。

（「とんだ」の語誌）

それでは本稿のテーマである「とんだ」について、『日本国語大辞典第二版』（小学館・2000年）により辞書的意味を確認しよう。

とんだ（常識をはずれるの意の「飛ぶ」から）

【一】〔連体〕⑴思いがけないさま、普通一般とかけはなれて変わっているさまを表わす。あきれたり、びっくりしたりする気持を込めて用いることが多い。とんでもない。ひどい。＊俳諧・伊勢俳諧新発句帳〔1659〕春「ひょっと出る蛙の哥やとんた作〈永治〉」…中略…

⑵（逆説的ないい方で）すばらしい。＊浮世草子・けいせい伝受紙子〔1710〕三・一「さのみ飛（ト）んだ趣向もなく」＊咄本・聞上手〔1773〕「ソレハソレハとんだ器量での」…中略…

【二】〔副〕思いがけないという気持を込めながら、下の記述を強調することば。たいへんに。ひどく。＊洒落本・遊子方言〔1770〕更の体「色男どふだ。とんださへないじゃないか」…以下略…

※用例は年代の早いもののみ掲載。傍線は前田。

ここから、「とんだ」は近世初期に「飛ぶ」から派生した程度強調の表現であり、過去の助動詞「た」の終止連体形をつけた形で用言修飾の用法を獲得し、副詞的用法も持っていたことが読みとれる（注5）。そして現代語における「とんだ災難だった」という例のように、非常識だと感じたり迷惑なイメージを伴うもの（注6）と、若干ニュアンスが異なっていることがわかる。

以下、「とんだ」を「きつい」と比較しながら考察する。「きつい」と「とんだ」は品詞を異にしながらもその終止連体形が程度強調表現を発展させた後、副詞的用法をも獲得したという共通点を持つ。

1　噺本における程度強調の全体像

はじめに、噺本における体言修飾の強調表現の全体像を確認する。前田2014において、噺本大系データベースから程度強調を表す表現「いかい」「き

つい」「えらい」「すごい」「ひどい」「とんだ」の６種の用例を採集した。その際、地域と時代とに区分した推移を表にまとめたので再掲する。江戸と上方に分けるのは、言語環境が異なり、使用に差異がみられる可能性を考慮したためである。

表１－１　噺本における強調表現　連体形のみ（上方）

※太字は 10 例以上のもの

	～1679	1680～1709	1710～1739	1740～1769	1770～1799	1800～1829	1830～1868	1869～	計
作品数(上方)	12	18	5	17	20	14	4	0	90
いかい	**15**※1	**27**	**12**	**14**	5	0	4	0	77
きつい	0	3	3	**14**	**54**	**22**	0	0	96
えらい	0	0	0	0	**19**	**19**	**18**	0	56
すごい	0	0	0	1	1	0	0	0	2
ひどい	0	0	0	0	1	5	2	0	8
とんだ	0	0	0	0	3※2	2※3	0	0	5

表１－２　噺本における強調表現　連体形のみ（江戸）

	～1679	1680～1709	1710～1739	1740～1769	1770～1799	1800～1829	1830～1868	1869～	計
作品数(江戸)	2	6	1	1	88	54	16	3	171
いかい	0	5※4	2※5	0	**15**	1	0	0	23
きつい	0	0	1※6	0	**134**	**22**	5	0	162
えらい	0	0	0	0	6	4	5	0	15
すごい	0	0	0	0	2	0	1	0	3
ひどい	0	0	0	0	2	2	1	0	5
とんだ	0	1※7	0	0	**191**	**88**	**20**	2	302

※1　1623「醒酔笑」が初例　　※2，※3 東国者とみられる話者の例 4 例。1 例は上方の僧侶の例
※4　1687「正直咄大鑑」，1688「二休咄」，1690「枝珊瑚珠」の用例
※5，※6　　1741 年「水打花」の用例　　※7　1687「正直咄大鑑」

表１－１、表１－２は上方、江戸の噺本作品に見られた用例数を30年毎に区切って集計したものである。上方の資料はどの年代も作品数が概ね20作品以内で極端な増減はないが、江戸の方は出版文化が発達した近世中期以降、特に江戸の文化の隆盛期である安永期（1772～）と文化文政期（1804～）に偏りが見られた。その点を加味しながら上方、江戸それぞれの強調表現の流れを図式すると、ほぼ以下のようになる。

	近世初期		近世中期		幕末
（上方）	いかい	→	きつい	→	えらい
（江戸）	—		きつい・とんだ	→	とんだ（きつい）

※明治の噺本では「きつい」は見られない。

つまり、上方では程度強調の連体修飾語として近世初期から中期に至るまでは「いかい」が最も勢力を持っていたが中期以降「きつい」、幕末には「えらい」に交代していく。一方江戸では江戸語が成立した近世中期に「いかい」「きつい」「とんだ」が見られたが、「いかい」はすぐに衰退し「きつい」「とんだ」が拮抗していた。その後「きつい」も幕末以降衰退した。なお、用例の偏りから、「とんだ」は江戸語とみてよいようである。

２　連体形の副詞的用法の実態

次に、上で述べた強調表現のうち用言を修飾するものに注目してみよう。「いかい」「きつい」「えらい」「ひどい」は、元来、形容詞の終止連体形であるが、用言を修飾する副詞的な用法があるという指摘がある。「とんだ」は動詞に源を持つ点で他とは異なるものの、同じく終止連体形でありながら用言にかかるのは、文法的破格という点で他と同様である。それぞれの語の用例を以下に示す。

＜いかい＋形容動詞＞

①其時病人おきあがり、扨〻いかい下手ないしやかな。風なれば此病おこる事でない。　（遊小僧　1694　上方）

＜きつい＋形容動詞＞

②友達が来て、コレきつい繁昌だげな。時に障子に、むさしの御茶づけとかいたが、…　（無事志有意　1798　江戸）

＜えらい＋形容詞＞

③ならバ、チヽチンの無間の鐘でも語りませうけれど、とんと何にも才かくが出きませぬが、漸若ひとき聞て置ましたゑらいゑい噺を、一つ思ひ出しました。　（鳩潅雑話　1795　上方）

＜えらい＋形容動詞＞

④ゑらいあほうじや　十六文たらん（しんぱん一口ばなし　1839　上方）

＜ひどい＋形容動詞＞

⑤申シ旦那様。あなたさまハひどいきれい好でござり升が…

（落噺千里薮　1846　上方）

＜とんだ＋形容詞＞

⑥三太郎〻このあいだのかいでにたかもハ、とんだうまかつた。

（はなし句応　1812　江戸）

＜とんだ＋動詞＞

⑦かねかしむかでや金兵衛か、とんだしやれたさいそくに、おにわうものりがきて、◇鬼王◇〻尤なる其さいそく。…

（面白艸紙噺図会　1844　江戸）

今回の調査範囲で見られた上記のような例を被修飾語の品詞別にまとめたのが次ページ表２である。

この表より、それぞれの語が名詞および名詞相当の語（動詞連用形＋よう）のみならず形容動詞や形容詞、動詞を修飾していることがわかる。しかし用例①～⑦からもわかるように、形容詞や動詞を修飾しているように見えても、さらにその次に体言を接続する用例も多いため、用言そのものにかかっているのか、その後の体言を修飾しているのか判然としない。

表２において、形容詞由来の強調表現（いかい～えらい）は、名詞接続の用例が最も多く、次に形容動詞、その他と続いていた。また、「いかい」「きつい」は近世前期から中期にかけて上方で発達した語であるが、特に「きつい」においては名詞修飾の用例がまず現れ、次いで形容動詞、形容詞という

表２　強調表現の被修飾語の品詞別分布（形式名詞等除く）

		上　方					江　戸					
語	被修飾語	1680～1739	1740～1769	1770～1799	1800～1829	1830～1867	1680～1739	1740～1769	1770～1799	1800～1829	1830～1868	1869～
いかい	名詞	29	9	3					10			4
	動詞連用形+よう		1									
	形容動詞	7	4				2					
	形容詞											
	動詞	1		1		1						
きつい	名詞	4	7	31	17				64	6	1	
	動詞連用形+よう		3	4			1		11	2		
	形容動詞		3	13	3				28	3	1	
	形容詞			1	1							
	動詞								3			
えらい	名詞			12	10	10			3	1	3	
	動詞連用形+よう					1						
	形容動詞			1	3	3			2			
	形容詞			2	1	1						
	動詞									1		
ひどい	名詞				4				2	1	1	
	動詞連用形+よう				1							
	形容動詞					1						
	形容詞											
	動詞											
とんだ	名詞				1				45	18	8	
	動詞連用形+よう			1					1			
	形容動詞			1					18	13	1	
	形容詞								39	21	5	
	動詞			1					9	5	2	

順に広がっていた。江戸語は上方で成長したその用法を近世中期頃に受け継いだものである。このことから、おぼろげにではあるが、一連の用法の共通的性格としては本来の名詞接続から、形容動詞を経由して次第に他の動詞や形容詞にかかるように用法を拡大したのではないかと考えられる。しかし動詞由来の「とんだ」だけは傾向が異なっており、名詞とともに形容詞にかかる用法が盛んで、それは形容動詞にまさっていた。

３ 「きつい」の被修飾語別分布

次に、これらの強調表現が修飾する語を具体的に見てみよう。「とんだ」を分析する前に、比較対象とした「きつい」の分析結果から確認する。表３－１、３－２は調査範囲内に見られた語をすべて取り上げ、年代別にまとめた表である。これによると「きつい」は、上方、江戸ともに特に用例数のもっとも多く拾える1770～1799までの年代において名詞、動詞連用形＋よう、形容動詞が見られたことが分かる。また上方には形容詞の例、江戸には動詞の例が少例ではあるが、みられた。

個別の語としては、上方と江戸の全体を見渡して、1770～1799年の欄には「音」「男」「世話」「人ごみ」などイメージがプラスにもマイナスにも偏らないごく一般的な語の他、「うそ」「恨み」「お見限り」といったマイナス評価の語や「得て物（得意）」「好物」のようなプラス評価の語、「お世話」「ご応(いら)

表３－１ 「きつい」の被修飾語一覧（上方）

※プラスイメージの語＿＿、マイナスイメージの語＿＿、丁寧表現、「好き」「嫌い」は太字。

上方	～1739		～1769		1770～1799		1800～1829	
	被修飾語	数	被修飾語	数	被修飾語	数	被修飾語	数
形式名詞	こと	2	もの	1	もの 3、こと 2	5	もの	1
名詞	目、やつ、贅、時化	4	**御法度**、掛け値、不覚え、代物、うそ、相違、ひげ	7	油、雨、大上戸、**御違者、お見限り**、癇癪持ち、勘略者、結構者、倹約、**御感心の様子**、こまり、寒さ、絶景、だてこき、縦縞好み、たわけ者、短気者、**馳走**、土、壺算用、罪、出来、通りもの、泥棒、熱な者、隙、評判、間違い 3、用心	31	雨、**おいため、お心遣い、お楽しみ、お見限り 3**、きまり、好物、**御粋**、料簡、腹立て、諸礼、助右衛門橋、面当て、**お好み**、無理言い	17
動詞連用形＋よう			入れよう、にじりよう、ちぢめよう	3	酔いよう 2、拝みよう、きしましよう	4		
形容動詞			災難じゃ、**能好きじゃ 2**	3	野暮じゃ、始末な、**好きじゃ、たじま好きじゃ**、派手な、**唐好き、きれい好き、物好きじゃ、タバコ好きじゃ**、下手じゃ、上手じゃ 2、無粋じゃ	13	繁盛な、奇妙じゃ、陽気な	3
動詞								
形容詞					はやい	1	おとなしい	1

表３－２　「きつい」の被修飾語一覧（江戸）

江戸	1717		1770～1799		1800～1829		1830～	
	被修飾語	数	被修飾語	数	被修飾語	数	被修飾語	数
形式名詞			もの、こと、	28	もの、こと、やつ2	11	もの 3	3
名詞			当たり、うそ 2、馬尽くし、恨み、得てもの、大傷、**お世話**、音、男、お見限り 3、かくし芸、甲子、きまり、禁句、禁物、薬、傾城、**ご応え**、好物、**御聖人 4**、時化 2、地震、愁嘆、世話、短日、知恵、違い 4、潰えなこと、鉄砲（うそ）、てれぼう、東風、通りもの、毒、毒消し 2、名、猫足、流行 3、人声、人ごみ、ふり、間違い 2、万八、味噌（自慢）、見立て違い、椋鳥、無理言い、物知り、喜び、投扇興、忠臣	64	**御病身**、違い、流行2、**お見限り 2**	6	瀬戸物	1
動詞連用形＋よう	仕やう	1	ふけよう、もてよう、しゃれよう、取りよう、寝よう、切れよう 2、錆びよう、幸せよう、**おごりなさりよう 2**	11	酔いよう、暇の取りよう	2		
形容動詞			**嫌いだ 4、男ぎらい、女嫌い、好きだ 8、めでた好き、八丈好き、鶴好き、物好き、タバコ好き**、下卑だ、貧だ、野暮だ、変だ、損だ 2、繁盛だ、賑やかな、無駄だ	28	**好きだ、嫌いだ、酒好きだ**、	3	**嫌いだ**	1
動詞			**付き合い方を知らぬ、おきらいなさるる、褒めてでござりました**	3				

え」「御聖人（立派な人）」のような「御」を伴う丁寧な表現、さらに「きつい付き合い方を知らぬ」「きついおきらいなさるる」など句を受けた例がみられる。それが1800年以降には用例数の減少とともに、丁寧表現の比率が高くなってくる。江戸においてはさらに「好きだ」「嫌いだ」の用法に偏って、その後衰退の一途を辿っている。以下、江戸における用例を挙げる。

（1800年～　江戸の例）

―名詞―

⑧女　アノ娘さんハきつい**御病身**ゆゑ、おあんじをなさると見へます。

（百の種1825　江戸　位相不明）

⑨〽ハテ、わきとハきつい**ちがい**といへば、

（おとぎばなし1822　江戸　下層町人）

⑩おいらがゐたじぶんハ、きついてうじちやが**はやり**であつた。

（おとぎばなし1822　江戸　下層町人女）

⑪きつい**お見かぎり**でございますね。

（身振噺寿賀多八景　1814　江戸　遊里の女）

―動詞＋様―

⑫三人一所に転ぶゆゑ、扨も〳〵きつい**酔やう**。

（江戸嬉笑　1806　江戸　上層町人）

⑬となり丁までいつてくるのに、今までかゝるとハ、きつい**ひまのとりやう**だ。　（おとぎばなし　1822　江戸　上層町人）

―形容動詞―

⑭〱わしハこのまんぢうがきつい**すきで**、まんぢう□□□（マヽ）あそんでいるから、　（落咄屠蘇機嫌　1817　江戸　下層町人）

⑮イヤおぢいさん。わたくしハもちハきつい**きらい**で御座ります

（笑ふ門　1804　江戸　舌切雀）

⑯むすこ〱おらが親父ハきつい**酒ずきで**、おれがしんたら…

（落咄口取肴　1818　江戸　上層町人）

４　「とんだ」について

先に２節の表２の結果から、「とんだ」は江戸に偏って現れ、江戸語的性格を持つと述べた。「とんだ」の語誌として挙げた日本国語大辞典の用例では、初例が上方の作品になっているが、上方の噺本資料においては例が極端に少なく、それも江戸人の発話に偏るようである（注７）。そこで、江戸に限定して見てみると、調査した作品数の増減を勘案すれば、1770～1799年、1800～1829年、1830～1868年の３つの時期とも、出現率に大きな偏りはない（表２）。このことは、「きつい」が1830年以降、急速に衰えたことと比較しても、安定して使用されていることを示している。

３節では、「きつい」の語性を考察し、1770年代には様々な語に幅広く用いられる一般的な程度強調の表現であることを確認したが、同じ時代に程度強調表現として使用された「とんだ」との間にどのような棲み分けがあるのか。次に、「とんだ」について見てみる。

まず、被修飾語における「きつい」との違いを指摘する。「きつい」は1800年代以降、丁寧表現に偏り、特に江戸の作品中において「好きだ」「嫌いだ」と共起する場合に偏って見られたが、その傾向は「とんだ」にはないようである。「とんだ」は幕末まで安定して一般に使用されており、いずれの時期もプラスイメージの語とも、マイナスイメージの語とも共起し、「御」を伴う丁寧表現の例も見られた。

⑰娘〲ヲヤ、おとゝさん。とんだ**うそ**斗つり

（笑の初り1792　江戸　上層町人女）

⑱うつくしいが、とんだ**ばかな**娘を、隣の鉄ぼう、いろ〳〵だまして、

（間女畑　1781　江戸　語り）

⑲いづれはなしの世の中、今歳時花といへば、浅草の開帳に、飛だ**霊宝**の拵へもの、能ひと悪ひハ見る人の上手…（乗合船　1778　江戸　序文）

⑳吉ぼうヤ。ふきや町の曲まくらを見たか。イヤ、まだ見ねいが、ひやうばんがイゝの。ヲゝサ、とんだ**上手**よ。

（近目貫三編　1773　江戸　下層町人）

㉑あのしやう〳〵緋といふものハ、何の皮だやら。飛だ**うつくしい**ものたが、…　（仕方噺　1773　江戸下層町人）

程度強調の表現として、好悪いずれをも強調できる、汎用性の高い語だったことがわかる。現代語の「とんだ」はマイナスのイメージが強いが、少なくとも近世にはそのような傾向は見受けられなかった。次ページに「きつい」と同様に「とんだ」の被修飾語を分類した表４－１を示す。

次に接続の面からみる。表４－２からもわかるように、「とんだ」は名詞、形式名詞（こと、もの）に接続するのはもちろん、動詞、形容動詞、形容詞にも盛んにつく。

㉒をらが長屋の明店に、まいばん化物が出るか、とんだ**ひねつた**ものさ。

（振鷺亭噺日記　1791　江戸　下層町人）

表４－１　「とんだ」の被修飾語一覧（江戸）

※プラスイメージの語＿＿、マイナスイメージの語＿＿、丁寧表現、「好き」「嫌い」は太字。

江戸	～1739		1770～1799		1800～1829		1830～	
	被修飾語	数	被修飾語	数	被修飾語	数	被修飾語	数
形式名詞			事 66、物 13	79	事 29、物 2	31	事 5、物 1	6
名詞	話	1	当たり、暴れ者、入り、うそ 2、大男、大食い 2、**お比丘尼様**、学者、きまり、掛け値 2、気 2、器量、獣、子、洒落、駄々、違い、鉄砲、所 5、鳥、名、なり、のらもの、はね（手柄）、光り物、引き札、人、振舞、屁、見世物、茗釜、妙薬、目、奴3、霊宝	45	悪女、悪性者、**おべらぼう様**、書出し、敵討、さよの中山、しりばり、馳走 2、でべそ、所 2、話、目 3、やつら、嘘八百	18	うがち、さわぎ、所 2、鉄砲（うそ）、花見、人、やつ	8
動詞連用形＋よう			上がり様	1				
形容動詞			意気だ 2、うわきな、大きな、おかしな、気丈な、気長だ、器用な、しゃれ、上手だ、酔狂だ、高直な、茶釜な 2、重宝な、馬鹿な、贔屓だ、べらぼうだ、	18	粋だ、うぬぼれな、大きな 2、おしゃべり、**倹約好きな**、高慢な 2、しあわせだ、冗談な、茶釜（でたらめ）だ、賑やかだ、不景気だ	13	ひょうたくれだ	1
形容詞			青い、いい 7、美しい 6、大きい、面白い 3、固い 2、軽い、こわい、高い 5、はかない、はしこい、早い 2、ひどい、広い、珍しい 2、めでたい、うまい、ええ、よい	39	暑い 2、いい 4、薄い、美しい、うまかった、大きい、重く、面白い 3、堅苦しい、気の強い、くさい、すさまじい、高い、強い、長い	21	ありがたい、いい 2、小さい、めでたい、	5
動詞			ひねった、うれしがる、冴える、惚れる、泣く、もてる、流行る、怖がる、ある	9	居る、昇る、流行る、惚れる、破れた	5	洒落た、下卑た	2

表４－２　「とんだ」の被修飾語一覧（上方）

上方	～1739		～1769		1770～1799		1800～1829		1830～	
		数		数		数		数		数
形式名詞					事	1	事	1		
名詞							名人	1		
動詞連用形＋よう										
形容動詞					気散じな	1				
形容詞										
動詞					有る	1				

㉓又そのあくる日もきて、見物を願う。とんだ**すいきような**。おまへの旦那ハなんだ。　（無事志有意　1798　江戸　上層町人）

㉔娘悦び、かゝさんや。介さんがの、とんだ**いゝ**櫛をくんなんした。コレ、見ておくれといへハ、ヲゝそれハゑゝこつた。

（聞上手三編　1773　江戸　下層町人女）

㉓は形容動詞、㉔は形容詞である。㉔は更に体言「櫛」を下接しているが、次の例㉕のように形容詞の言い切りの形も見られた。

㉕ある時、母おや、おめしをくわせるとて、けふのめしハ、とんだ**こわい**といへバ、子〻ナアニ、獅子でハあるまいし

（百福茶大年咄　1789　江戸　下層町人女）

江戸の「きつい」には形容詞を修飾する例が見られなかったが（表３－２）、「とんだ」には形容詞を修飾する例が多く見られた。形容詞「きつい」が同じ形容詞を修飾するおさまりの悪さに対し、動詞「とんだ」は違和感が少なかったとも考えられるが、一方で動詞「とんだ」に動詞修飾が多いのはなぜだろうか。それを敢えて述べるならば、それだけ「とんだ」の用法の広がりに勢いがあったということかもしれない。

５　「きつい」「とんだ」の話者別分類

前田2014において「きつい」の使用は、どの時期においても上層町人に多かった。最も用例数の多い1770年代以降の30年間はさまざまな階層に渡るが、噺本の登場人物としては下層町人が最も多いことを考えると、表の分布は上層町人や遊里関係者の使用率が高いと言わざるを得ない。

上層町人や遊里関係者の使用率が高いことを証明するために、登場人物の台詞量とほぼ比例すると思われる指定の助動詞の用例数と位相別に比較したものを示す（注8）。

これで見ると、明和安永期（1772～）においては下層町人を100とすれば上層町人は42.3、遊里関係者は遊女と使用人を含めて8.1の割合となる。「きつい」の1770年代は下層町人男女39例に対して上層町人55例、遊里関係者（遊女、客、使用人）が20例なので、登場人物の出現率と比較しても、上層町人と遊里関係者の「きつい」使用が高いことになる。さらに、形容詞、動詞を修飾する場合も、上層町人や遊里関係者に使用が偏っていた（表5）。

（比較対象）江戸噺本の指定の助動詞使用数
―明和安永期（1772～1781）―

表５　「きつい」「とんだ」の位相別出現頻度
―1770 年～1799―

位相	ダ	ジャ	合計	**指数（下層町人基準）**	きつい	**指数（下層町人基準）**	とんだ	**指数（下層町人基準）**
武士	19	25	44	**10.8**	2	**5.1**	1	**1.1**
上層町人	86	97	183	**42.3**	55	**141**	33	**34.7**
下層町人	330	79	409	**100**	39	**100**	95	**100**
遊里関係男	12	6	18	**4.4**	13	**33.3**	8	**8.4**
遊女	11	4	15	**3.67**	7	**17.9**	4	**4.2**
よそ	10	4	14	**3.42**	3	**7.7**	4	**4.2**
地の文（語り）	0	5	5	**1.2**	7	**17.9**	32	**33.7**
位相不明					8	**－**	14	**－**

以上のことから「きつい」は、近世中期に上方、江戸ともに様々な語を修飾するごく一般的な程度強調表現として定着したのち、後期には次第に上層町人の敬語表現や遊里における通人好みの用法に偏った。それと同時に「とんだ」に押される形で、使用範囲を縮小しながら次第に消えていった語である、と考えた。

一方の「とんだ」は、指数をみても上層町人が34.7、遊里関係者が12.6（遊里関係の男8.4　遊女4.2）と、指定の助動詞の出現比率と大きな隔たりはなく、各位相の人物の出現率に近い数値が出ているといえる。つまり「きつい」が上層町人と遊里関係の男性に偏っていたこととは対照的に、武士を除いて、ほぼどの層にも万遍無く使用されていたことがうかがわれる。なお、地の文（語り）における使用が多いという傾向もあった。

６　用言を修飾する「とんだ」について

ところで、「きつい」「とんだ」ともに、用言の終止連体形由来の程度強調表現でありながら用言修飾の例が多数みられたのはどういう事情によるのだろうか。そこで形容動詞、形容詞、動詞を修飾する「きつい」の使用実態を調べてみた。表６－１は用言使用の話者の位相別分類である。調査の結果、1770年代以降「きつい」の用言修飾用法がどの階層にも使用され、特に形容

表６－１　用言修飾の話者位相別分類（きつい） 形容動詞…数字、形容詞…○数字、動詞…●数字

	上方						江戸		
	～1679	1680～	1740～	1770～	1800～	1830	1770～	1800～	1830～
調査資料数	12	18	5	20	14	4	88	54	16
武士									
上層町人			1	6	3		9❷	1	1
上層町人女							❶		
下層町人				2①	①		9	2	
下層町人女							2	1	
遊里客							4		
遊里の男							1		
遊女				1			2		
語り			2	2			2		
不明				2①					

動詞において一定の定着が見られることが分かった。

用例の出現数の関係で、江戸と上方における形容詞、動詞の比較はできなかったものの形容動詞には一定の用例数が得られた。形容動詞が体言＋繋辞という語構成であることを考えると、これが体言に最も近い用言と言える。そのことと表６－１から、まず形容動詞を媒介にして、その後、他の用言に波及して使用されるようになったことを窺わせる分布となったと考える。

では「とんだ」を見てみよう。「とんだ」は、調査資料成立時（1772『鹿の子餅』以降）から形容動詞、形容詞、動詞の三者がすでに入り乱れ、位相による偏りや遅速を推し量ることができなかった。しかし、形式名詞、名詞の用例数の多さ（表４－１）を考えると、「きつい」同様に、形容動詞を経由して用言に広がったとみるのが穏当なところであろう。そして、1770年代以降、形容詞接続の用例の多さから考えると、すでに連体詞から独立して、副詞としての機能も持っていたといえそうである。

表６－２　用言修飾の話者位相別分類（とんだ）

形容動詞…数字　形容詞…〇数字　動詞…●数字

	上方	江戸		
	1770～1799	1770～1799	1800～1829	1830～1867
武士		①	③	
上層町人		4 ⑧ ❶	2 ②	①
上層町人女		①	①	
下層町人		5 ⑪ ❶	4 ⑥ ❷	1 ②
下層町人女		④	③	①
遊客		2 ①	① ❶	
遊女		② ❶	① ❶	
遊里の男				
遊里の女				
地方出身者	1 ❶	1		
不明		④ ❶	①	①
語り、題など		6 ⑦ ❺	7 ③ ❶	❷

まとめ

以上のことから、噺本における「とんだ」は、

1　近世中期以降、江戸において程度強調表現として「きつい」をしのぎ、最も広く使用された語である。

2　口語において盛んに用いられた一方で、語り（噺本の地の文）においても使用頻度が高く、文語的表現とも共起できる語であった。

3　形容動詞はもちろん動詞や形容詞をも修飾し、近世中期には連体詞としてのみならず副詞としての機能を備えていた。

とまとめることができる。１に関しては、近世中期にともに盛んに用いられた「きつい」が後期になるに従って丁寧表現やかけひきの表現と共起し、次第に遊興の場に用法が狭まっていったのに対し「とんだ」は近世末期まで用法の広さを保ち、被修飾語の意味や話者の位相にも特に偏りの見られない程度強調表現として幕末まで使用されたことが確認できた。

また３に関しては、「きつい」が修飾するのは用言では形容動詞が中心で、

動詞はごく少数、形容詞は江戸では皆無だったことから副詞的用法は限定的であったと考えた。一方の「とんだ」は用言全般を広く修飾し、副詞用法がすでに近世中期には確立していたことが窺われた。

さらに、表現性に関して言えば、現代語のニュアンスとは異なっていた。現代語の「とんだ」は強調表現として一般的であるとは言えず、「思いがけず、迷惑だ」というニュアンスを含む、用法の狭い語である。しかし、近世中期から後期にかけては、使用範囲の広いごく普通の語であったということを確認した(注9)。程度強調の表現は、近世を通じて「いかい」「きつい」「えらい」「とんだ」と、世代交代を繰り返してきたが、現代においてもまた、「すごい」「やばい」と、次々に新しい形式が生まれている。「とんだ」における近世以降現代までの衰退の過程について、今回は調査の及ぶところではなかったが、これも現代の用法に向かって徐々に用法を縮小しながら、次世代の程度強調表現にその座を譲っていったのであろうと考えている。

【注】

1　現代語においても、話し言葉としての程度強調の副詞には、従来からある「えらく」「おそろしく」「すごく」「ひどく」「すさまじく」から、若者語に分類される「めっちゃ」「だんとつ」「ちょー」まで様々な表現があり、入れ替わりが激しい。「凄い」「酷い」「大変な」などはそれぞれ述語として使用されていたものを、その本来のニュアンスを帯びたまま程度の甚だしさという表現性に単純化させて使用したものと考える。この方法をとれば類似の語はいくらでも自由に生み出すことができるのである。

2　前田桂子2014において、噺本における主な程度強調表現の使用状況をとらえると共に、以下の３点を指摘した。

1　上方では程度強調の連体修飾語として近世初期から中期頃まで「いかい」が最も勢力を持っていたが中期以降に「きつい」、幕末には「えらい」に交代していく。一方江戸では江戸語が成立した近世中期に「いかい」「きつい」「とんだ」が見られた

が、「いかい」はすぐに衰退し「きつい」「とんだ」が拮抗していた。その後「きつい」も幕末にかけて衰退した。

2　近世中期において「きつい」は、上方、江戸ともに体言修飾から形容動詞を仲立ちにして用言修飾に拡大していき、副詞的用法を持った。中でも江戸では否定形の句を受けるという例まで見られた。用言修飾に「きつく」ではなく「きつい」の形が現れたのは、程度強調表現「きつい」が本形容詞から独立して副詞化の方向に進もうとした片鱗であると考えた。

3　近世中期から後期における「きつい」が衰退に向かう過程で、上方、江戸ともに「御」を伴う丁寧表現や「好きだ」「きらいだ」という感情を表出させる語との共起に偏っていった。同時に話者も上層町人や通人、趣味人に次第に限定され、気取った定型表現という形で徐々に使用が縮小した。特に江戸においては遊里の中での使用が目立った。

3　村山昌俊1986「江戸語『とんだ』考」（『滝川国文』２）
増井典夫1989「近世後期における形容詞「きつい」の意味・用法とその勢力について」（『淑徳国文』）31）　なお増井氏には、主に洒落本を資料とした「えらい」「いかい」に関する６本の論稿があり、『近世後期語・明治時代語論考』（2012）に所収されている。

4　口語資料として洒落本より価値が低いと言われる噺本をあえて資料に選んだのは、会話が中心の作品群であることと、一定ジャンルとして近世全体を覆い、時代を追って数量的比較ができるだけのテキスト量を持っていること、そして何よりも登場人物や場面が多岐にわたることを重視したためである。国文学研究資料館より公開されたテキストデータベースの利用は、何パターンもの検索とデータ整理が可能であり、今回の研究にとって有効であった。

5　村山昌俊1986「江戸語『とんだ』考」（『滝川国文』２）において、頴原退蔵「川柳雑俳用語考」（『頴原退蔵著作集』所収）の「とんだ」の語源は「飛ぶ」であり、「飛び離れる意から転じて通常と異なる意に用いられ、多く『とびたる』『とんだる』『とんだ』の形で用いられたものから

成立した」という論が紹介されている。村山氏はさらに、「とんだ」は「とんでもない」と関係ないことを「とでもない」との関連から考察している。

6　森田良行1980『基礎日本語２』角川書店　などに記述がある。

7　表１－１・表１－２の脚注に示したように、上方の例として挙げた５例のうち４例が上方以外の人の発話である。以下、用例を挙げる。

〇〽フウ、貴さまも江戸へいつたか。おらもこのぢうまで江戸へいつていたが、とんだきさんじな所だなあ。

（新製欣〻雅話1799　江戸帰りの関西人）

〇権兵へ〽左様でござります。なんと申ても、御大名のたくさん有所で、御大名ハ金ハとんだ有。（軽口筆彦咄町人　1795　江戸出身者）

〇〽それハとんだ事じや。どれ先だして見せさつしやれ。庄屋、ふろしきをときて、かの頭をいだせバ、和尚ハ手にとつてうちながめ、…

（腮のかけがね1826　和尚）

〇遠国の客、菅原を見て宿へ戻り、扨哥右衛門ハけしからねヱ上手だ。序切りの伝授場、二段目、すくね太郎、四段目松王、イヤモ、とんだ名人だ。　（璃寛芝翫花競二巻噺1813　遠国の客（江戸人））

〇アノナ、京の大仏にかい帳するげな。めづらしい事でハないカイ。何を、われも飛んた事いふものじや。　（年忘噺角力1776　下層町人）

8　前田桂子　2004「言語史資料としての江戸噺本の研究」九州大学博士論文

9　冒頭に挙げた日本国語大辞典の記述では「（２）（逆説的な言い方で）すばらしい。」とあり、近世の用例が挙げられている。ここから「とんだ」が近世においてマイナスの表現性を持つことが前提であるかのように読み取れるが、マイナスの表現性に偏ったのは明治以降のことであり、必ずしも正確な記述とはいえないのではないか。今回の近世語としての調査ではプラスマイナスに関わりなく広く用いられる語であった。

【参考文献】

彦坂佳宣　1982「洒落本の語彙」(『講座日本語の語彙５』p.201～202

増井典夫　1989「近世後期における形容詞「きつい」の意味・用法とその勢力について」(『淑徳国文』) 31)

〃　1991「形容詞『えらい』の勢力拡大過程」(『淑徳国文』32)(『近世後期語・明治時代語論考』所収　p.78) なお同氏には、主に洒落本を資料とした「えらい」「いかい」に関する６論稿が『近世後期語・明治時代語論考』に所収されている。

村山昌俊　1986「江戸語『とんだ』考」(『滝川国文』２)

前田桂子　2014「噺本における程度強調表現『きつい』の消長」(国語と教育　第39号　長崎大学国語国文学会)

【調査対象資料】　噺本資料（噺本大系データベース）

上方噺本

～1679－「かなめいし」寛文３年（1626),「醒酔笑」寛永５年（1628),「昨日は今日の物語」寛永13年（1640),「わらいくさ」明暦２年（1656),「百物語」万治２年（1659),「理屈物語」寛文７年（1667),「一休はなし」寛文８年（1668),「私可多咄」寛文11年（1671),「竹斎はなし」寛文12年（1672),「一休諸国物語」寛文12年（1672),「一休関東咄」寛文12年（1672),「狂哥咄」寛文12年（1672),

－1680～1709－「当世軽口咄揃」延宝７年（1680),「軽口大わらひ」延宝８年（1681),「囃物語」延宝８年（1681),「当世口まね笑」延宝９年（1681),「当世手打笑」延宝９年（1682),「籠耳」貞享４年（1687),「新竹斎」貞享４年（1687),「軽口露がはなし」元禄４年（1691),「遊小僧」元禄７年（1694),「諸国落首咄」元禄11年（1698),「初音草噺大鑑」元禄11（1698),「露新軽口はなし」元禄11年（1698),「初音草噺大鑑」元禄11（1698),「露五郎兵衛新はなし」元禄14年（1701),「軽口御前男」元禄16年（1703),「軽口きやう金房」元禄16年（1703),「軽口あられ酒」宝永２年（1705),「露休置土産」宝永４年（1707),

－1710～1739－「軽口福蔵主」正徳６年（1716),「軽口もらいゑくぼ」享保頃（1717),「軽口はなしとり」享保12年（1728),「軽口機嫌嚢」享保13年（1728),「軽口初売買」

元文４年（1739），

－1740～1769－「軽口福おかし」元文５年（1740），「軽口新歳袋」元文６年（1741），「軽口耳過宝」寛保２年（1742），「軽口出宝台」享保４年（1744），「軽口へそ順礼」延享３年（1746），「輕口瓢金苗」延享４年（1747），「軽口笑布袋」延享４年（1747），「軽口浮瓢箪」寛延４年（1751），「軽口腹太鼓」宝暦２年（1752），「軽口豊年遊」宝暦４年（1754），「軽口扇の的」宝暦12年（1761），「軽口東方朔」宝暦12年（1761），「新軽口恵方宝」明和頃（1762），「新軽口初商ひ」明和頃（1762），「軽口はるの山」明和５年（1768），

－1770～1799－「軽口片頬笑」明和七年（1770），「軽口大黒柱」安永２年（1773），「軽口大黒柱」安永２年（1773），「軽口五色帋」安永３年（1774），「年忘噺角力」安永５年（1776），「軽口駒佐羅衛」安永５年（1776），「夕涼新話集」安永５年（1776），「立春噺大集」安永５年（1776），「時勢話大全」安永６年（1777），「時勢話綱目」安永６年（1777），「春帖咄」天明２年（1782），「歳旦話」天明３年（1783），「夜明烏」天明３年（1783），「軽口四方の春」寛政６年（1794），「鳩灌雑話」寛政７年（1795），「軽口筆彦咄」寛政７年（1795），「春の行衛」寛政８年（1796），「新話違なし」寛政９年（1797），「臍が茶」寛政９年（1797），「庚申講」寛政９年（1797），「新製欣々雅話」寛政11年（1799），

－1800～1829－「曲雑話」寛政12年（1800），「新話笑の友」享和１年（1801），「新撰勧進話」享和２年（1802），「新撰軽口麻疹噺」享和３年（1803），「玉尽一九噺」文化５年（1808），「画ばなし当時梅」文化７年（1810），「会席噺袋」文化９年（1812），「臍の宿かえ」文化９年（1812），「璃寛芝翫花競二巻噺」文化11年（1814），「絵本戯忠臣蔵噺」文政ごろか（1818），「春興噺万歳」文政５年（1822），「小倉百首類題話」文政６年（1823），「腮のかけがね」文政９年（1826），「噺栗毛」文政12年（1829），

－1830～1868－「噺の魁二編」天保15年（1844），「一口ばなし」天保10年（1839），「落噺千里薮」弘化３年（1846），「大寄噺尻馬初編」嘉永頃（1848），「万灯賑ばなし」嘉永５年（1852），「雨夜のつれづれ三題咄」明治初年（1868），

江戸噺本

－～1679－「私可多咄」寛文11年（1671），「秋の夜の友」延宝５年（1677），

－1680～1709－「杉楊枝」延宝８年（1680），「武左衛門口伝はなし」天和３年（1683），「鹿の巻筆」貞享３年（1686），「正直咄大鑑」貞享４年（1687），「二休咄」貞享５年（1688），「枝珊瑚珠」元禄３年（1690），

－1710～1739－「水打花」享保頃（1717），

－1770～1799－「楽牽頭」明和９年（1772），「鹿の子餅」明和９年（1772），「聞上手二篇」安永２年（1773），「聞上手三篇」安永２年（1773），「御伽噺」安永２年（1773），「近目貫三編」安永２年（1773），「口拍子」安永２年（1773），「今歳咄」安永２年（1773），「坐笑産」安永２年（1773），「仕形噺」安永２年（1773），「飛談語」安永２年（1773），「聞上手」安永２年（1773），「再成餅」安永２年（1773），「芳野山」安永２年（1773），「出頬題」安永２年（1773），「稚獅子」安永３年（1774），「茶のこもち」安永３年（1774），「富来話有智」安永３年（1774），「春みやげ」安永３年（1774），「和漢咄会」安永３年（1774），「一のもり」安永４年（1775），「聞童子」安永４年（1775），「新口花笑顔」安永４年（1775），「蝶夫婦」安永６年（1777），「今様咄」安永４年（1775），「はなし亀」安永４年（1775），「春遊機嫌袋」安永４年（1775），「高笑ひ」安永５年（1776），「鳥の町」安永5年（1776），「新口一座の友」安永５年（1776），「売言葉」安永５年（1776），「一の富」安永５年（1776），「頓作万八噺」安永５年（1776），「書集津盛噺」安永５年（1776），「頓作万八噺〔題簽〕」安永５年（1776），「管巻」安永６年（1777），「春袋」安永６年（1777），「譚嚢」安永６年（1777），「さとすずめ」安永６年（1777），「買言葉」安永６年（1777），「今歳笑」安永７年（1778），「春笑一刻」安永７年（1778），「乗合舟」安永７年（1778），「青楼吉原咄」安永７年（1778），「気のくすり」安永８年（1779），「金財布」安永８年（1779），「寿々葉羅井」安永８年（1779），「鯛の味噌津」安永８年（1779），「大御世話」安永８年（1780），「万の宝」安永９年（1780），「初登」安永９年（1780），「自在餅」安永末年頃（1780），「はつ鰹」安永10年（1781），「うぐひす笛」天明頃（1781），「間女畑」天明頃（1781），「富久和佳志」安永末年頃（1781），「柳巷訛言」天明３年（1783），「笑上戸」天明４年（1784），「徳治伝」天明７年（1787），「独楽新話」天明８年頃（1788），「百福物語」天明８年（1788），「下司の智恵」天明８年（1788），笑の種蒔」天明９年（1789），「太郎花」寛政頃（1789），「かたいはなし」天明９年（1789），「新米牽頭持」天明９年（1789），「百福茶大年咄」天明９年（1789），「炉開噺口切」天明９年（1789），「比文谷噺」天明９年（1789），「落話花之家抄」寛政２年（1790），「新作徳盛噺」寛政２年（1790），「福種笑門松」寛政２年（1790），「振鷺亭噺日記」寛政３年（1791），「和良嘉吐冨貴樽」寛政４年（1792），「笑の初り」寛政４年（1792），「笑府衿裂米」寛政５年（1793），「上青楼育咄雀」寛政５年（1793），「滑稽即興噺」寛政６年（1794），「喜美談語」寛政８年（1796），「噺手本忠臣蔵」寛政８年（1796），「巳入吉原井の種」寛政９年（1797），「詞葉の花」寛政９年（1797），「三才智恵」寛政９年（1797），「鶴の毛衣」寛政10年

（1798），「無事志有意」寛政10年（1798），「新作塩梅余史」寛政11年（1799），「腮の掛金」寛政11年（1799），「意戯常談」寛政11年（1799），

－1800～1829－「虎智のはたけ」寛政12年（1800），「臍煎茶呑噺」寛政12年（1800），「滑稽好」寛政13年（1801），「馬鹿大林」寛政13年（1801），「福種蒔」寛政13年（1801），「新玉箒」寛政10年（1798），「御贔屓咄の親玉」享和２年（1802），「山しよ味噌」享和２年（1802），「落咄臍くり金」享和２年（1802），「一口饅頭」享和２年（1802），「六冊懸徳用草紙」享和２年（1802），「花の咲」享和３年（1803），「珍学問」享和３年（1803），「福山椒　」享和３年（1803），「落咄腰巾着」享和４年（1804），「笑府商内上手」享和４年（1804），「東都真衛」享和４年（1804），「一雅話三笑」文化頃刊（1804），「笑ふ門」文化頃刊（1804），「はなし亀」享和４年（1804），「無塩諸美味」文化頃刊（1804），「新作落語蛺蝶児」文化２年（1805），「落咄見世びらき」文化３年（1806），「諢話江戸嬉笑」文化３年（1806），「正月もの」文化３年（1806），「瓢百集」文化４年（1807），「落噺常々草」文化７年（1810），「妙伍天連都」文化８年（1811），「種がしま」文化８年（1811），「はなし句応」文化９年（1812），「福三笑」文化９年（1812），「笑嘉登」文化10年（1813），「百生瓢」文化10年（1813），「富久喜多留」文化11年（1814），「身振噺寿賀多八景」文化11年（1814），「駅路馬士唄」文化11年（1814），「落咄熟志柿 」文化13年（1816），「落咄屠蘇機嫌」文化14年（1817），「落咄口取肴」文化15年（1818），「落咄福寿草」文政２年（1819），「工夫智恵輪」文政４年（1821），「おとぎばなし」文政５年（1821），「はなしのいけす」文政５年（1822），「落噺屠蘇喜言」文政７年（1824），「百の種」文政８年（1825），「升おとし」文政９年（1826），

－1830～1868－「新作笑話の林」天保２年（1831），「十二支紫」天保３年（1832），「落噺笑富林」天保４年（1833），「延命養談数」天保４年（1833），「百歌撰」天保５年（1834），「落噺年中行事」天保７年（1836），「新作可楽即考」天保13年（1842），「百面相仕方ばなし」天保13年（1842），「しんさくおとしばなし」弘化頃刊（1844），「古今秀句落し噺」天保15年（1844），「面白艸紙噺図会」天保15年（1844），「縁取ばなし」弘化２年（1845），「俳諧発句一題噺」嘉永４年（1851），「落噺笑種蒔」安政３年（1856），「三都寄合噺」安政４年（1857），「春色三題噺初編」元治元年刊（1864），

－1869～「昔咄し」明治３年（1870），「一口ばなし」明治13年（1880），「落語の吹寄」明治18年（1885），

（長崎大学教育学部　まえだ　けいこ）